

「子宮移植」臨床研究を承認

慶応大 国内初の実施判断へ

慶応義塾大学病院は27日、病氣のために子宮を持たない女性に第三者の子宮を移植して妊娠・出産につなげる「子宮移植」の臨床研究について、同大学の審査委員会が実施計画を承認したと発表した。同病院は今後、国内初となる子宮移植の実施を判断する。

生まれつき子宮がない「ロキタンスキー症候群」という病氣の女性など、20～30代の約3人を対象に実施する。この病氣は4000～5000人に1人の割合で起きるとされる。

同病院は2022年に学内の委員会へ実施計画を申請し、審査が続いていた。

移植を望む人は卵子を採って体外受精し、凍結保存する。そのうえで第三者の子宮を移植する。

提供者となる第三者は母や姉妹などの親族を想定する。

移植後は免疫抑制剤を服用しながら経過を観察し、移植した子宮が拒絶されず機能することを確認する。その後、受精卵を子宮に入れて妊娠につなげる。帝王切開で出産し、その後子供を望まなければ子宮を摘出する。

研究責任医師を務める。

慶応義塾大の木須伊織専任講師は「子宮がない子供を持ちたいと強く願う人にとって、子宮移植は選択肢が広がる希望の光だ。実施を見据えて前向きに準備を進めた」と話した。今後、同病院は移植を安全に実施するための体制を整えた上で実施するか判断する。

病氣などで子宮を失った女性も出産の機会を得られるようになる可能性がある。一方、健康な提供者の体にメスを入れることには倫理的な課題を指摘する声もある。病気で命を落とす可能性がある患者を救うための一般的な臓器移植とは異なる。